

手の届く景色から



作家・作詞家
高橋久美子

地域のために、と背負うより 小さな穴を掘って進む 「アリの歩み」を



愛媛県の東予にある、小さな町で生まれました。実家は兼業農家で、家族みんなで過ごした田んぼや畑が、私の原風景。しかし最近では担い手不足の問題もあり、荒れ放題の土地が増えています。仕方なく田畑を手放す人も。とうとう実家周辺の農地を、ソーラーパネル業者に売る計画が立ち上がったのが、2019年。東京に拠点があり、それまでは農繁期に月1で帰って手伝う程度だった私ですが、「あの大好きな風景が消えてしまうのは、いやだ。誰もやらないなら、私が残したい!」と思ってしまった。一人では無理。だけど、仲間がいればきっとできるはずだと。そして、実家の隣町に住む若い人たちを仲間に引き入れ、愛媛と東京を行き来しながら、実家周辺の土地で農業を始めました。



機械化や自動化がなかなかできない中小規模の農業は、想像以上に過酷でした。サトウキビの栽培に挑戦したところ、猿に畑を襲撃されて、全滅。夏は酷暑が続き、熱中症に。猪にモグラ、雑草に長雨。うまくいかないことばかり。でも2年越しにサトウキビの栽培に成功し、それをピカピカの黒糖にすることができたのは、本当に嬉しかった。自分が食べるものを、自分の手で生産する喜び。仲間と一緒に、それを分かち合う楽しさ。最初のころは「久美ちゃん、甘いわ」「どうせ長続きしない」と訝しげだった近所の人たちも、次第に「若い人が農業について興味をもってくれて、嬉しい」「地域が明るくなった」と喜んでくれるように。少しずつ「やった」と思える瞬間が、積み重なっていきました。

少子高齢化の進む今、若者は、どの地域でも貴重な存在になっているでしょう。でも、若者が地域を“背負う”ことはない、私は思います。第一、まだあまり経験を積んでいないのに、そんな大きなものを背負ったら、潰れてしまいますよね。

もし、「地域のために何かしなければ」と思う高校生がいたら、「あなたが生きていてだけで、もう地域のためになっている。そんなに気負わないで」と伝えたいです。いきなり地域に大きな穴を開けるのは無理。だから、アリの掘るくらいの小さな穴を掘って、少しずつ、少しずつ進んでいく。自分に掘れるサイズの穴を掘っていった先で、仲間が見つかったり、地域の人からの信頼を得られたりするのではないのでしょうか。遠くのことを憂う前に、まずは自分の半径300メートルの範囲を大切に。ちょっと近所をぶらぶらして、畑仕事をしているおばあちゃんに「草むしり、手伝いましょうか」と話しかけてみるくらいのことで、きっと十分なんです。すぐそばの大切な場所にも、やれることはたくさんあるはずですから。

Profile

たかはし・くみこ●1982年、愛媛県生まれ。鳴門教育大学在学中、ロックバンド「チャットモンチー」にドラム、作詞家として加入。音楽活動を経て、詩、小説、エッセイ、絵本の執筆のほか、さまざまなアーティストに歌詞提供を行う。現在は愛媛と東京の二拠点で暮らし、愛媛では農家をしている。

わたしの農継ぎ (ミシマ社)



取材・文／塚田智恵美



地域に根ざし、 未来を 織りなす仕事

地方での人口減少や少子高齢化といった社会課題が身近に迫る今、本特集では「地域に根ざして働く」というキャリアに着目します。

「地方創生」や「地域貢献」といった大きな目標を掲げた活動でなくても、目の前の仕事にほんの少しの地域への視点を加える「ちょっとした行動」の積み重ねこそが、町の未来を創っていくのではないのでしょうか。そんな等身大の働き方を、各地で生き生きと働く人々の姿や、有識者による解説、学校と地域が一体となった教育活動の事例を通してご紹介します。

そして、読者の先生方もまた、日々の教育活動を通じて地域の未来を織りなす重要な一人です。本特集が、身近な地域というフィールドを再発見するきっかけとなり、将来生徒たちがどこで暮らすとしても、自分の手で居場所を耕し、地域と関わる未来を語り合うためのヒントとなれば幸いです。

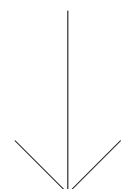


地域を織りなす 10人の働き方

現在働く場所を選んだ経緯は、
地元就職やUターン、Iターンなど人それぞれです。
次ページから、日々の仕事や暮らしの中で、
地域との関わりを築いている社会人10名の
多様な働き方をご紹介します。



Go to next page





大好きな地元の福井のために、
自分にできることを

福井銀行本店内で地域に開放しているライブラリー「WiL」にて

CASE

1

株式会社福井銀行 経営企画グループ 経営企画チーム統合推進室

織田瑞花さん

福

井出身で高校までは地元で育ちました。でも、都会へのあこがれがあり、大学の進路選択では神戸の大学に進学しました。神戸での生活も楽しかったのですが、福井の自然豊かな環境や家族が恋しくホームシックに。就活時に人生の歩み方を考え、働くだけでなく日々心地よく過ごすことが大切だと思い福井に戻る決意をしました。金融機関を選んだのは、人が好きで、多様な年齢層や職種の方々と関わりながら仕事ができると思ったからです。

地方銀行は地域のお客さまのために存在していますが、福井銀行は特に「地域の課題解決業」と銘打ち、グループ会社を含め、金融に限らずコンサルティ



ング、DX、観光など幅広い分野で余すところなく地域課題に取り組んでいて、その一員となれていることに誇りを感じています。

私自身の仕事では、営業店で法人営業を担当していたコロナ禍のときに、製麺所を経営するお客さまのご相談を受けました。従来、生麺を作っていた企業でしたが、時節により「保存がきく乾麺を作りたいがノウハウがない」とお困りだったのです。私が担当するお客さまだけでなく福井銀行のお取引先には乾麺を作る会社、具材をフリーズドライする会社、パッケージをデザインする方などがいらっしゃいます。行内の先輩や同期にも相談しながら市内でそれらができる企業を結び付け、地域全体を巻き込んでお客さまの課題を二人三脚でゼロベースから解決するお手伝いできました。こうした事例が行内には多々あるのです。

業務上で地域課題に取り組むだけでなく、現在、福井県全体の課題に取り組みたい気持ちがあり、行内の有志が集まるDEI(Diversity, Equity&Inclusion／多様性、公平性、包摂性)推進の活動もしています。福井県は女性の就業率は全国トップクラスなのに、男女の賃金格差や役割格差などが大きいというデータがあり、女性が活躍しにくいというイメージを県民自身も持っている気がしていたのです。例えば、高校の同窓生でも県外に進学した女性は戻ってこないことが多いと感じていました。福井銀行では2022年からDEI推進に力を入れて活動しており、アンコンシャス・バイアス※チェックや研修などの取組を始め、行内の意識が変わり始めています。そうした取組に賛同してくれる福井県内の他企業と共に進めていて、私も施策立案に参加したり、社内の好事例を他社に紹介したりしています。

福井にはメガネなどの地場産業も多いですし、営業時代の経験から、働きやすく、魅力的な企業がたくさんあることを知っています。大好きな福井が、女性だけでなく一人ひとりにとってもっと働きやすい地域になるよう、自分にできることをやっていきたいです。

※アンコンシャス・バイアス…無意識の偏見や思い込み

おりた・みずか●1994年福井県生まれ。福井県立勝山高校、神戸女子大学文学部教育学科卒業後、地元である福井にUターンし株式会社福井銀行入社。支店での窓口・法人営業、本部での営業支援グループを経て2023年より現職。2026年の福井銀行との合併業務に尽力。





やってもらったことを、
日々の仕事で返しています

CASE

2

福岡市漁業協同組合姪浜支所

野上隆昌さん

博

多湾で漁師をしています。5月から7月は鯛などを獲るごち網漁。8月から4月は海苔の養殖。海苔は市内の学校給食にも出していて、学校から依頼があれば海苔の作り方の出前授業もします。地元の消防団にも所属しています。水難事故があれば船で出動し、救助活動にあたるんです。夏の海水浴の時期には週1回くらい出ることもありますね。救助のための訓練も年に数回行います。

地元の姪浜は、昔は漁師だらけの街でした。父ちゃんが漁に出て、帰ってくると仲間と一緒に酒を飲み、そこに子どもたちも交じって遊ぶ。そうした日常を



通して、楽しそうな仕事だと思ったんです。漁師の朝は早く、目覚めると両親が家にいないこともあり、でも隣のおばちゃんが居てくれたりと、周囲に見守られながら育ちました。だから漁師になったときに、消防団にも入って海の見守りをしよう、と自然に思いました。地域のためとか大げさな話ではなく、自分がやってもらったことをやっている感じです。

漁師を続けるなかで考えが変わったこともあります。最初は、漁に出れば魚が獲れるし、海苔網を海に張れば海苔が採れる、という感覚だったんですよ。ところが最近では、毎年毎年、今年が一番悪いというような漁獲量や生産量が続いている。自分たち姪浜の漁師はこの海を借りているのであって、このままだと博多湾での漁業を次の世代につなげることができなくなる、と思うようになりました。

例えば姪浜産の海苔は、以前は知名度のある有明産に値段で負けていたのを、地元の代々の漁師が味付け海苔など加工品も売り出し、30年かけて口コミで評判を呼び、全国に販路を拡大してきました。その灯を絶やさず未来につなげたい、という思いは、我々の代にもあるんです。

そこで、どうすれば豊かな博多湾を取り戻せるか探ろうと、水産海洋技術センターなどの専門機関に教を請い、漁師仲間毎週、水質調査もしました。わかったことは、下水処理場の整備により、川から海に流れ込む水がきれいになりすぎて、海苔や魚の栄養分となるリンや窒素が不足していたことです。自分たちで声を上げ、市の下水処理場と定期的な話し合いを始めました。現在は、海を汚染しない基準を守りつつ、栄養分を除去しすぎない処理をする工夫をしてもらっています。

思い返せば、父ちゃんたちの代の漁師は、植林もしていたんですよ。山に木を植えにいく。当時は「そうやってみんなで酒を飲みに行きよるだけやろ」と見ていましたけれど。そうした取組も、山から川、川から海へと栄養を巡らせて、博多湾の漁業を次の世代につなげるためのものだったんだな、と今になって思います。

のがみ・たかまさ ● 漁師の家に生まれ、親からは「厳しい世界だから継がなくていい」と言われ、大学卒業後に食肉加工会社の営業職に就く。5年後、自らの意志で漁師になり、消防団にも所属。福岡市の各区の消防団は、1月の出初式で披露する「まといぶり」という伝統芸能も継承しており、その担い手も務める。



地域の食と人のつながりが
私を成長させてくれる



CASE

3

株式会社エルサン フード&ビバレッジ事業部 主任

佐藤 渚さん



形県鶴岡市の結婚式場グランドエル・サンで料理人をしています。地元の鶴岡は、在来作物[※]の多さや郷土料理の食文化を評価され日本初のユネスコ食文化創造都市に認定されました。私は2023年に市の「次世代ガストロノミーコンペティション」(以下、コンペ)に参加してグランプリを受賞。それ以来、郷土料理に関するさまざまな活動に参加させていただいた経験から、この素晴らしい食文化を地元の人や、子どもたちに伝えていきたいと考えています。でも実は、コンペに出るまで、鶴岡の食文化のすごさにまったく気づいていませんでした。

※在来作物…特定の土地で長年栽培され、種苗の維持がされながら、地域の食文化に根づいてきた作物



父が料理人、祖母も料理上手で祖母の家庭料理が郷土料理だったのですが、自分にとっては当たり前の日常。おいしいものを作って人を喜ばせられる祖母や父をカッコいいと思っていたので、漠然と料理人になりたいと考えていました。高校時代の進路選択でその気持ちが固まり、調理の専門学校に進学後、現在の会社に就職しました。

新人の頃は料理人としての技術を磨くことばかり考え、料理人の娘というプライドもあり突っ張っていたこともありましたが、ある日恩師である当時の料理長から、「お客さまのためにおいしいものを作りたいとか、喜ばせたいという気持ちを込めて作らないと、いくら技術が高くても喜んではもらえないと思うよ」と言われて。自分が料理人を目指した原点を思い出しはっとしました。

恩師が定年退職するタイミングでコンペの話聞き、自分が成長した姿を見せられたら恩返しになると考えて参加することにしました。コンペのテーマは「郷土料理や在来作物といった鶴岡独自の食文化や歴史の伝承」。さらに、在来作物の生産者や郷土料理の指南役とペアでメニューを開発することが条件でした。職場に、いつも手作りの差し入れを持ってくる佐藤八重さんという方がいます。祖母の味を思い出し、祖母と重ねて見ていた八重さんに指南役をお願いしました。

参加を決めて初めて在来作物を調べ、その多さに驚きました。鶴岡市羽黒町松ヶ丘は旧庄内藩士が開墾してできた街。街を歩いて当時の藩士たちの気持ちを想像したりしたときに、彼らがいなかったらこの街も自分も存在していなかったと気づきました。そして、松ヶ丘の郷土料理「いもごぼたもち」を再構築し、一皿の中で鶴岡の風景と、過去・現在・未来を表そうと考えたメニューでグランプリを受賞できたのです。

家族の存在、恩師や八重さんとの出会い、刀を鋏に持ち替え庄内を立て直した庄内藩士に思いを馳せることを経て、技術を磨くだけでなく地域の食文化を次世代へつなぐ視点をもてました。鶴岡は、料理人として、人間として私を成長させてくれる場所です。

さとう・なぎさ ● 1997年山形県鶴岡市生まれ。山形県立庄内総合高校、酒田調理師専門学校卒業後、結婚式場のグランドエル・サンを運営する会社に就職。2023年、鶴岡食文化創造都市推進協議会主催「第3回次世代ガストロノミーコンペティション」グランプリ受賞。

地域の新たな魅力に

採石業だからできたことが、



CASE

4

きしま
蛇島開発株式会社 代表取締役

中村 旦さん



「採石業」と聞いてどんな業種かイメージできる人は少ないのではないのでしょうか。山や岩盤を砕いたり爆破させて基礎石材を採石する事業で、私にとっては祖父の代から続いている家業です。幼少期から重機がかっこいいと思っていたことや、経営者として尊敬できる祖父や父の姿を見て、採石業はあこがれの仕事でした。大学卒業後、修業のために建設機械の会社に就職しましたが、3年半後に、父が二代目として継いでいた中村碎石に入社しました。広島が本拠地で私も広島出身です。現在私は、山口県周南市にある関連会社のきしま蛇島開発で社長を務めています。広島から通勤していますが、昨年まで



所属していた周南の青年会議所(以下、JC)の仲間とのつながりから、私にとっての地元は今では周南だと感じています。

当初、JCの仲間にも採石業と自己紹介しても「何をしているの?」と。採石業は都市開発にはなくてはならない仕事です。原野に工事関係の仮設事務所を建てる段階から、地盤を造るために石が必要。開発の最後に造るのが道路で、アスファルトの下には石が敷かれています。地図が変わるような大きな仕事の最初から最後まで関われる不可欠な仕事なのに知られていなかったのです。

自分たちだからこそできることで採石業の認知度を上げたいと考えていた2024年、爆破を観光にして体験ツアーを行っている栃木県の会社がテレビで紹介されていました。爆破は我々の業務の一環です。自分たちにもできるかもしれないと思い、その会社に見学に行かせていただいたところいろいろなアドバイスを下さり、半年後には自分たちで「周南爆破」という新事業を立ち上げました。炎と煙の爆破を身近で体験していただき、撮影会をするツアーです。

プレスリリースを出すと地元のテレビ局などで紹介され、コスプレイヤーやご当地ヒーロー、結婚記念の撮影など、たくさんの方に来ていただけるようになりました。周南爆破とともに会社と採石業の認知度が上がり、地元の徳山高専から課題解決型授業への協力を要請されたり、市役所からふるさと納税の体験型返礼品にしたいと依頼が来たり、地域とのさまざまなつながりが生まれています。何より、従業員のモチベーションが上がったことが嬉しかったですね。採石業では当たり前の爆破が、地域の方々からこんなにも喜んでもらえることを目の当たりにして、自分たちの仕事に誇りがもてたようです。採石業の認知度を上げたいという思いが、周南という地域と会社の活性化につながりました。



誰でも爆破体験と撮影会ができる「周南爆破」。ご当地ヒーローとのコラボ写真も注目を集める。

©清流光神ハクジャオー

なかむら・あきら●1985年広島生まれ。崇徳高校、愛媛大学工学部卒業後、日立建機株式会社入社。3年半勤務した後、広島で実家が経営する中村砕石株式会社に入社。同社が吸収合併した山口県周南市の蛇島開発株式会社の3代目代表取締役社長に2024年に就任。翌年から「周南爆破」の事業を始める。



分断を緩和する
クッションになりたい

地元の太田市美術館・図書館にて

CASE

5

am国際行政書士オフィス 代表行政書士

井手口睦美さん

外

国人住民数の多い群馬県太田市で、行政書士として帰化申請や在留資格の手続きをサポートしています。また、隣の伊勢崎市で外国人の子どもたちの日本語教室の代表も務めています。こうした活動を始めたのは、中学と高校をこの地で過ごすなかで、日本人と外国人の分断を感じ、何とかしたいと思ったからです。当時、日本語が不得意な外国人の生徒たちは仲間同士で固まり、一方で私たちも、言葉の壁があってその子たちと積極的に関わろうとしなかったんですよ。

私が日系三世^{*}で、宙ぶらりんの状態にいた影響もあります。日本で生まれ

^{*}日系三世…日本から海外に移住した日本人の第三世代。井手口さんの場合は、祖父母がブラジルに移住、現地で生まれた父母が日本に戻り、以降に生まれた。このケースでは出生時は親と同じブラジル国籍となる。



育ち、日本語を話しているのに、親の出生の関係で国籍はブラジル。ずっと葛藤がありました。大学生のときにブラジルに1年間留学すれば、ポルトガル語が下手で「国籍は同じでもあなたはブラジル人じゃない」とされる疎外感も味わいました。思春期に悩んだからこそ「過去の自分のような子どもに対して、力になれる大人でありたい」と思ったのです。

大学卒業後、日本国籍を取るために帰化申請。書類を揃え、許可が下りたとき、初めて足元が定まったような感動を覚えました。と同時に、手続き面では古い情報や嘘の情報が出回っているのを痛感しました。私は、外国人に対する風当たりが強まっているように感じられる昨今の現状も、この「手続きの問題」と無関係ではないと思っています。正しい情報にアクセスできずに手続きの不備が生じ、国が厳しい対応を取らざるを得なくなる。その背景が見過ごされたまま、メディアなどで双方の感情だけが拡散され、対立を生んでいるのではないのでしょうか。

外国人の方々に正しい情報、一次情報を、易しい言葉で伝え、「日本で胸を張って暮らせる」ように支援したい。そうして日本をより好きになってほしい。分断を少しでも緩和していくクッションのような役割を担えたら、と思うようになりました。

まず試したのがポルトガル語での動画投稿。でも「何者でもない私」では支持されませんでした。そこで働きながら朝と夜に勉強し、3年かけて行政書士の資格を取り、開業しました。とはいえ当時は20代の若輩者。地域ですぐ信頼されたわけではありません。群馬県行政書士会太田支部に入り、積極的に運営のお手伝いもし、地元ですずっとやってこられた先生方と交わりました。そうした地域のキーパーソンの方々は、若い人のバイタリティを求めてもいて、多方面につないでくださったんです。

日本語教室の子どもたちには、「小さなことからいいので、好きなことを怖がらずにやってみよう」と伝えています。「やりたい」と思ったことの勉強は何歳からでもできるんだ、と、私自身も身をもって学んだからです。

いでぐち・むつみ ● 中学や高校を群馬県太田市で過ごし、大学でブラジルに留学。大阪で商社に勤め、結婚を機に鳥取県へ。行政書士の資格取得後、外国人支援のニーズの高い太田市に家族で戻る。高校時代は勉強よりもバンド活動に熱中。「私が行政書士になった、と当時の先生が知ったらびっくりされると思う」とのこと。



仲間とつながる楽しさが、
町の未来を創るんです



耕作放棄地を再生した梅畑にて

CASE

6

岡本農園 代表／株式会社日向屋 代表取締役

岡本和宜さん

う

ちは祖父の代から紀州南高梅とみかんの農園を経営しています。25歳のとき、長男としての自分なりの責任感から、県内のホテルを辞めて実家で農業を継ぎました。サービス業から一転、何もしゃべらない梅やみかんの木と向き合う毎日。人との関わりが少ないことがストレスで、最初は楽しくありませんでした。

あるとき、農家の儲けが少ない構造に疑問をもち、提示された値段で卸すのではなく、「自分で生産した物に、自分で値段をつけて売りたい」と考えるように。みかん生産の少ない他県の道の駅に目をつけ、得意のコミュニケーション力を



活かして、「おいしいみかんを作っているので販売させてください!」とガンガン飛び込み営業して回り、少しずつ直販に移行。梅についても、独自に販路を開拓していきました。そのなかで農業が面白いと感じるようになっていき、自分はただ作るだけでなく、人と人をつないで課題解決する“サービス業”なのだと気づいたのです。

そのころ地域では、シカやイノシシが農作物を食い荒らす獣害が急増していました。自分たちの畑は自分たちで守るしかない、地域の若手でチームを結成し、狩猟免許を取得。力を合わせ、1年間で約120頭を捕獲しました。地域の方にも感謝され、私も嬉しかったのですが、次第に人の都合で命を奪う行為にしんどさを感じるようになり…。鳥獣害対策抜きにはできない農業を、地域の子どもたちはやりたいと思うだろうかと、危機感をもちました。

そこで、動物の命に感謝してジビエとして無駄なく活かす仕組みを作ろうと、ジビエ解体・加工施設の創設に向けて動き出しました。人づてに出会った腕利きのジビエ職人を「一緒にやろう」と巻き込み、地域住民にも丁寧に趣旨を説明して賛成を取りつけて施設を開設。市外の農家にも広く協力を呼び掛け、安定的にジビエ生産・販売ができる仕組みをみんなで作りました。

鳥獣害の背景には、耕作放棄地の増加や農家の後継者不足などさまざまな課題があり、根本的な解決には新規就農の拡大が不可欠です。その仕組みづくりのため、狩猟チームの仲間と日向屋を設立しました。耕作放棄地を再生し、そこに新規就農者を呼び込み、農産物の加工・販売も行っています。

その活動内容と意義を講演やSNSで発信するなか、賛同者が全国から集まり、一緒に仕事をしています。応援してくれる県外の関係人口も増え、例えば東京のイベント出展の際には現地の皆さんが大勢手伝いに来てくれるようになりました。

今後やってみたいのは、この地で培った農業の課題解決の経験・スキルを、ほかの地域で活かすこと。一つの場所に固執せず、「楽しい」を原動力に、いつまでもチャレンジャーであり続けます。

おかもと・かずのり●1979年生まれ。ホテル勤務を経て、和歌山県田辺市の実家・岡本農園を承継。鳥獣害対策のための狩猟チーム結成や、ジビエ解体・加工施設「ひなたの杜」創設を主導。2018年に株式会社日向屋設立。同社の取組は令和4年度鳥獣対策優良活動表彰農林水産大臣賞ほか受賞。



島の風景、人の営みをつなぐ
自分たちの仕事が、



CASE

7

株式会社island company
旅と暮らし事業部 ヒューマンリソースマネージャー

町田すみれさん

東

京で生まれ育ち、都内の幼稚園で教員として働いた後、現在は鹿児島県の西部にある甕島^{こしきじま}で暮らしています。island companyという会社
に所属し主にホステルの運営をしながら、ヒューマンリソースマネージャーとして各
店舗のヘルプをやりくりしてチーム全体をつないでいます。都会育ちですが幼
少期から、群馬のNPOの自然体験活動に家族で参加しており、森の中で自由
に暮らす経験からいつか地方で暮らしたいという想いがあったんです。

30歳になったときに幼稚園の仕事が多忙を極め、「このままでいいのか?」と考
え退職。1年余り、移住先を探す旅をしました。そんな昨年の春、地域の困り



ごとを手伝うことで報酬を得ながら旅をするプロジェクトで現在の職場を初めて訪れました。

island companyは地元出身の山下賢太社長が「百年先の風景をつくる」をミッションに、豆腐屋をはじめとして、パン屋、行商、古民家ホステルなどを営み、島外からの移住者が働いています。それぞれ主とする担当はあるものの、お互いの業務を手伝いながら運営しています。最初は2週間の滞在でしたが、スタッフたちとの交流の楽しさが忘れられず、再度数カ月の滞在予定で訪問。そのときに、社長の妻であり食の事業部門を担当する山下麻由さんから「あなたは人を巻き込む力がある。がんばり過ぎるほかのスタッフたちが肩の力を抜ける新しい風を吹かせてほしい」と言っただき、正式に入社することになりました。

実は同じことを高校時代の恩師から言われたことがありました。部活での悩みを他部の先生たちに相談したりしていたのです。すると体育祭のときにその先生たちが「体育祭実行委員長に立候補しろ」と。人前に出るタイプではないと固辞する私に、先生は「一人では何もできないことをわかっているからこそ、周りに声をかけて頼り、みんなで楽しく進められる。それがあなたの強みだ」と。無自覚だったその力は、幼稚園の仕事でも周囲と共に課題を解決するチームワークづくりをするときの励みにもなりました。

私たち移住者を島の人々は「豆腐屋の子たち」と呼んでくれます。甕島は人口約3500名。今は自治会にも加入して地域の清掃活動などにも参加していますが、すれ違う人に意識的に「こんにちは」と挨拶を交わしたり、豆腐屋に1日3回来てくれるおばあちゃんのおしゃべりにじっくり耳を傾けたり。そうした日常の些細な関わりも含めて、会社の存在自体が島の暮らしと地続き。風景や人のつながり、文化などを守っていくための豆腐屋でありパン屋なのです。日々働いていくことが、この島の未来をつないでいくための一片を担っていると感じながら心地よく暮らしています。

まちだ・すみれ●1992年東京都生まれ。東京都立葛飾総合高校、日本女子体育大学幼児発達学専攻卒業後、東京都目黒区の平塚幼稚園で教諭として勤務。幼稚園退職後、「おてつたび」で鹿児島県甕島のisland companyと出会い、アルバイトを経験した後、島に移住。主にFUJIYA HOSTELで勤務。



足元の自然で勝負する
当たり前前にそこにあった、



CASE

8

株式会社西部建設 代表取締役

古味雄也さん



「淀ブルー」で知られる清流、仁淀川の上流にある町で生まれ育ちました。大学進学とともに県外へ。「これからの時代はITだ」と、神奈川県で経営情報を学んだあと、東京と大阪でシステムエンジニアとして働いていました。

実家は祖父の代から続く建設会社です。私が26歳のとき、父の体調悪化を機に、Uターンして家業を継ぐことに。父から「継いでほしい」と言われたことは一度もなく、自分で決めました。だからこそ、ここで生きていく覚悟ができたのだと思います。



継いだ会社の経営は、順風満帆とは言えない状況でした。建設の資格も経験もない若造ですが、社員や家族の生活を守らなければならない。その一心で、各種認証の取得やM&Aなど、自分にできるやり方で経営基盤づくりに奔走し、少しずつ成果が出るように。しかし、地域の人口減少に伴って建設需要も減っているなか、この先も建設業一本でやっていくことへの危機感は、ずっと心にありました。

突破口のヒントになったのは、あるプライベートの出来事です。Uターン以降、毎年、前職の同僚が高知に遊びに来てくれていました。主要な観光スポットは案内し尽くし、次に考えたのが仁淀川での「体験」です。川底まで見通せる透明のカヤックを購入し、同僚たちを乗せたところ、みんな大興奮で雄大な自然と川の美しさを楽しんでくれて。都会にないものが、ここにはある。当たり前のようにそこにあった、自然という地域の財産で勝負できるのではないかと考えるようになったのです。

そして2020年、自社の新規事業として、カヤックなどの体験ができる仁淀川アウトドアセンターを開設。体験の様子をドローンで撮影するサービスを始めるなど、体験価値を上げる努力を重ねています。初年度800人だった利用者数は年々増加し、25年度は年間2万人を超えました。

目の前の人の生活を守ろうと地域と関わるなかで、だんだん地域や自然環境の課題もなんとかしたいと考えるようになりました。町の人口は減少が続いていますが、アウトドア事業を軸とする観光で若い世代の流入を図り、楽しい町にしていきたいと考えています。

また、自然環境の保全は、この地域だけの課題ではありません。ここでの体験を通じて自然環境を大切にしようという気持ちが芽生え、それぞれの地域に持ち帰ってくれたら—そんな思いで、アウトドアセンターの新しい空間づくりやコミュニケーションの企画を進めています。さらに、大学の先生と共同で、自然体験が人に及ぼす影響についての調査研究も始めました。小さな町ですが、ここからの発信が、広い地域の自然環境に影響を与えることだってできるのだと信じています。

こみ・よしなり●1986年、高知県仁淀川町生まれ。神奈川県大学の卒業後、東京と大阪でシステムエンジニアとして勤務。2013年に家業の西部建設に入社、半年後に代表取締役就任。2020年、同社の新規事業として仁淀川アウトドアセンターを開設。仁淀川町観光協会および商工会副会長。





伝統文化を守り、
つないでいくのが私の役割

CASE

9

株式会社社寺建 宮大工

後藤亜和さん

普

通科高校を卒業後、大工の道に進みました。元々は“人を守る”仕事に就きたくて警察官を目指していたのですが、建築士の父が手掛ける伝統木造建築への興味と、小さいころからのづくりが好きだったことから、大工も選択肢の一つと考えるように。大工は力のある男性の仕事というイメージもあったのですが、「ひとまず1年間やってみよう」と軽い気持ちで決めました。

初めは専門的な知識も技術ありません。伝統構法を活かした木造住宅の建築現場に見習い大工として入り、棟梁について、道具の使い方から学んでいきました。そのなかで、自分の造ったものが誰かの住む家の一部として残ると



思うと嬉しくて。同時に、伝統構法という日本の“文化を守る”仕事のやりがいも感じるようになり、気づいたら1年が過ぎても大工を続けていました。

火災で焼失した首里城正殿の再建に携わることになったのは、大工3年目のとき。当初、住宅大工だった私は、社寺や文化財を専門とする宮大工の高度な仕事には関われないと半ば諦めていたのですが、父の知人を介して社寺建に採用され、当時最年少の大工として参加することになったのです。

現場では、唐玻豊^{からはふう}※を飾る彫刻の下絵作りなどさまざまな経験をさせてもらっていますが、主な担当は正殿を支える丸柱の加工です。住宅建築とは、扱う木材の大きさも、使う道具の種類や数も違います。先輩方に教えていただきながら、一つひとつできることを増やしてきました。

「令和の復元」と呼ばれる今回の工事には、約30年前の「平成の復元」に携わったベテランが多く参加し、私たちのような若手に熟練の技術を教えてくださっています。よく言われることのひとつが「木を見て使いなさい」。木は生きているので、後々に反りが出そうな部分を見極めて加工することが重要です。ベテランは「触ればわかる」と言いますが、私にはまだその感覚は掴めていません。何年もかけて体で覚えていくしかないと思っています。そして、先輩たちから受け継いだ技術を次の代へとつなげていけたら——最近では、“文化を守る”だけでなく、それを未来に“つなぐ”ことも、私の大切な役割だと考えるようになりました。

正殿の完成は今年の秋。宮大工だけでなく、漆、瓦、電気などのさまざまな職人の仕事が積み重なって出来上がります。あの火災から再び立ち上がった姿を見て、誰かが少しでも前向きな気持ちになってくれたら嬉しいです。

完成後、私は全国の寺社再建現場で技術を磨いていく予定です。この先、結婚や出産などを経て大工を続けることが、技術を授けてくださる皆さんへの恩返しだと思っています。そして、いつか首里城の別の棟の復元に、棟梁として関わりたい。それが今の目標です。

※唐玻豊…首里城の「顔」とも言える中央部分(写真中央)

ごとう・あや●2002年、沖縄県北中城村生まれ。普通科高校を卒業後、木造住宅の大工として修業を開始。2023年10月より、文化財建造物の修復・復元も手掛ける株式会社社寺建に所属し、火災で焼失した首里城正殿の再建に現場最年少(当時)の宮大工として参加。





地域の人の暮らし、
必要とされることをする

元農協米倉庫をリノベーションした交流拠点「Sorrisoriso」にて

CASE
10

編集者
中川晃輔さん

5 年前に東京から長崎の東彼杵町^{ひがしそのぎ}に移住し、フリーランスの編集者として妻と1歳半の子どもと暮らしています。前職では多様な働き方や生き方を紹介する求人サイト『日本仕事百貨』の編集長を務めていました。日本全国のさまざまな働く方々の取材をする日々で、仕事と暮らしが重なる生き方に触れるうちに、地方に移住したい気持ちが湧いてきたのです。

2020年にコロナ禍で会社がリモートワークになり、働く場所の自由度が上がったことで移住計画が現実的になりました。車で移住先を探すなかで、ここ東彼杵町の景色がとても気に入ったんです。

宿泊先のゲストハウスで「移住したい」と伝えると、地域のコーディネーターとして活動をされている森 一峻さんを紹介されました。森さんは地元出身で地域の交流拠点をつくったり情報発信サイト『くじらの髭』などを手掛けたりされている東彼杵のキーマン。その森さんの周りには、コーヒーやフレンチ、アンティーク、福祉とアート、お茶や宿など、さまざまな分野で自分のお店や事業を営むかっこいい大人たちが集まっています。たどり着いたきっかけこそ景色でしたが、面白い人やいいお店の存在も、このまちに住みたいと思った理由の一つです。

移住して以来意識しているのは、“地域の人”として当たり前のように生活することです。自治会や消防団に入ったり、お茶摘みの手伝いをしたり。暮らしを楽しむなかで人となりが見えてきて、プライベートも仕事においても、声をかけてもらえる機会が増えてきたように感じます。

例えばライター講座。全5回にわたって「きいて、書く」ことを学び合う場づくりを森さんたちと一緒に進めました。いきなり仕事として相談があったわけではなく、日々顔を合わせて話すなかで「こんなこともできないかな?」と企画が立ち上がっていった一例です。県内外のライター経験者だけでなく、花屋さんや地域おこし協力隊など、さまざまな立場の20名ほどの方々が参加してくれました。また、伝統工芸の波佐見焼振興会から「会社ごとではなく産地全体で人を受け入れたい」と相談を受け、伝統産業のインターンシッププログラム『オープンハサミ』を共同で企画・立ち上げたりしました。

自分から営業をかけるというより、まず地域に飛び込んで相手の想いを丁寧に聞き、自分のもつ編集や企画のスキルを掛け合わせて一緒に新しい仕事を形にする。この流れが、私にとっての地域との関わり方です。

移住して気づいたのは、自分は家事が好きだということ。暮らしの充実をベースに仕事をするという、理想としていた生活に近づけている気がしています。

なかがわ・こうすけ ● 1992年千葉県生まれ。千葉県立東葛飾高校、慶應義塾大学環境情報学部卒業後、在学中からインターンとして働いていた株式会社シゴトヒトに入社、『日本仕事百貨』の編集を担当。2018年に編集長に就任。コロナ禍をきっかけに2021年に長崎県東彼杵町に移住し、フリーランスとなる。

「地域を出るか、残るか」の二択を超えて ローカルキャリア という歩み方

地域に根ざして働くことの、真の価値とは一体何か？
産官学の経験があり、各地の地方創生事業や人材育成、
キャリア研究に携わる石井重成さんに、
多様な形で地域に根ざすローカルキャリアの歩み方と
地域をフィールドに、生徒たちにもたらしたい視点や
経験について解説していただきました。

いいい・かずのり●国際基督教大学を卒業後、経営コンサルを経て東日本大震災を機に岩手県釜石市へ移住。官民連携の復興まちづくりを推進。2021年より青森大学に着任。研究領域は地方創生と震災復興。各地の地域活性や組織開発も手掛けている。

青森大学社会学部 准教授
社会連携委員長
石井重成さん



地域の「心臓」として働く

「地方よりも大規模都市のほうが、魅力的な仕事や成長機会が多い」と、よく言われます。しかし、必ずしもそうとは言えないのではないのでしょうか。これは、私自身の体験に基づく実感でもあります。大学卒業後、東京の経営コンサルティング会社に勤めた私にとって、転機となったのが、東日本大震災の翌年に被災地を訪れたことです。まだあちこちに瓦礫が残るなか、地域の若い人たちが「自分たちの手で、

街を作っていこう」と熱く語り合う姿に、大きな衝撃を受けました。そして会社を辞めて、縁もゆかりもない岩手県釜石市へ飛び込んだのです。釜石市役所で勤めた9年間は本当に学びが多く、正直なところ、東京で勤めた4年間よりも、はるかに人間的に成長できたと感じています。

その「成長できた実感」は、一体どこから来るのでしょうか。ここで一つ、興味深いデータをご紹介します。私が代表理事を務める一般社団法人地域・人材共創機構が、2019

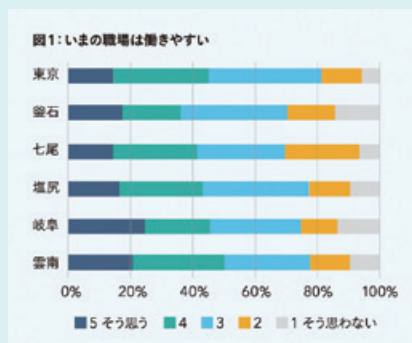
地域に根ざして
働くことの、
真の価値

自分の役割の大きさと バッテリーボックスの立ちやすさ

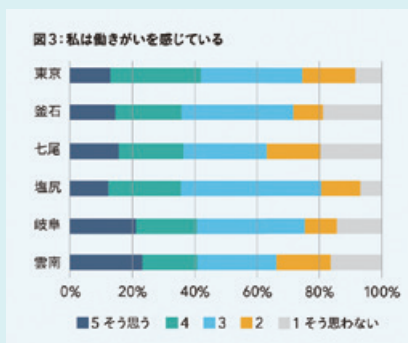


ローカルのほうが「自分の仕事が周りに影響を与えている」と実感しやすい？

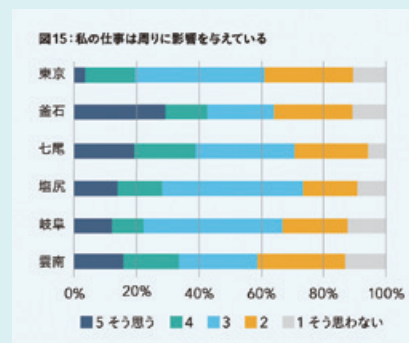
「働きやすさ」の比較



「働きがい」の比較



「周りへの影響」の比較



「そう思う」と「ややそう思う」を足したスコアでは
東京と地方都市での違いはあまり見られなかった

「そう思う」と「ややそう思う」を足した
スコアでは
東京より地方都市のほうが高い

図／『ローカルキャリア白書2019』（一般社団法人地域・人材共創機構）より引用

年に発行した『ローカルキャリア白書』の調査結果です。東京で働く人と、人口数万人規模の地方都市で働く人の意識を比較したところ、「働きやすさ」や「働きがい」の指標については、両者に大きな差はありませんでした。しかし、「自分の仕事が周りに影響を与えているか」という問いに対しては、地方で働く人のほうが高い結果が出たのです。

これは、地方という環境の特性によるものと考えています。例えば、人口約3万人の釜石市と約23万人の渋谷区では、コミュニティに占める一人の重みが異なります。極端な言い方をすれば、都市部では、大きな仕組み

の中で「一部品」を担うような働き方になりがちですが、地方では、組織の「心臓」になって働くチャンスがある。おのずと、自分の存在価値や影響力を感じやすいのだと思います。

狭い組織では良くも悪くも相手の顔が見えやすく、自分の仕事に対するフィードバックがわかりやすく返ってきます。そして何より、人手不足が叫ばれる今、地方は圧倒的に「バッテリーボックス」に立ちやすい環境です。打席に立つチャンスが多く回ってくる場所で、思い切りバットを振ってみる。そんな成長のアプローチも、大いに考えられるのではないのでしょうか。

ローカル
キャリアの
あり方

地域への関わり方は多様で
グラデーションがあっている

「人手不足だから困り込み」 には無理がある

このように、地方で働くことには、大きな手応えと魅力があります。しかし、実際は「とはいえ、選択肢は都市部のほうが多い」「賃金の差を思うと、まずは都市部に就職して、スキルアップしたほうがいいのでは」といった現実的な思いもよぎるでしょう。

ここで伝えたいのは、**地域への関わり方は決して「0か100か」ではないということです。**

人生のすべてを一つの地域に捧げるか、まったく関わらないか、の二択で考える必要はありません。私はローカルキャリアを「地域で自分らしく豊かに暮らす人」と表現していますが、そのあり方は多様です。

本業をもちながらパートタイム的に地域に関わったり、副業やプロボノとして参加したりできる機会は、今や全国的に増えています。例えば、福島県柳津町では50歳未満の住民が主体となって、町民参加のまちづくりを実践する「ミライツナガル会議」という場があります。病院勤務の看護師、農業に携わる方など、多様な職業の人たちが集まり、町のことを話し合う。そこで出たアイデアをもとに、町が実際に政策化を進めます。この会議がきっかけで、住民が提案した施策について、審査の

うえで柳津町が事業費を出す「私が創る柳津町ミライプロジェクト」などの取組が誕生しました。町について語り合うだけでも、地域との立派な関わりになります。自分の年代やライフステージに応じて、関わり方の「グラデーション」を柔軟に変えていけばいいのです。

自治体の地域活性事業や人材・組織開発にも携わる立場から言うと、地域の大人が「人手不足だから、若者が地域から出ていかないうような教育をしよう」と困り込もうとするのには、やはり無理があります。

青森県の公立高校のデータを見ると、高卒と大卒のタイミングで県内企業に就職する生徒は、全体の20数%しかいません。つまり、70数%の生徒たちは、一度は県外へ出て行くのが現実です。となると、私たち大人が考えるべき大切な問いは、県外に出る生徒も含めて**「いつか機会があったら、この地域で何か活動したいな」と思える余白をもたせて送り出せるか。**それが、地域の未来にとって重要だと考えています。

地域への愛着を育てるのは 「作り手」としての経験

どのようにして、地域に対する愛着は生まれるのでしょうか。

地理学者であり文化人類学者でもある川喜

生徒と
地域をつなぐ
視点

個人の意思の蓄積によって
そこが「ふるさと」になる

田二郎氏は「ふるさととは、子どもながらに全力傾注して創造的行為を行った場所のこと」と語っています。つまり、ふるさとというのは、単に「生まれた場所」や「育った場所」を指すのではありません。子ども時代に、自分の意思で、全力で何かに取り組んだ場所。受け手ではなく「作り手としての経験」が蓄積された場所が、結果としてその人にとっての「ふるさと」になるのです。ということは、いくら大人が地域の魅力的な情報をシャワーのように浴びせても、本人が受け身の状態のままでは、本当の意味での地域への愛着やシビックプライドは生まれま

せん。私自身、愛知県の出身ですが、生まれ育った地元よりも、自分の意思で飛び込み、意思をもって活動してきた釜石市や青森市に、よっぽど強い愛着をもっています。

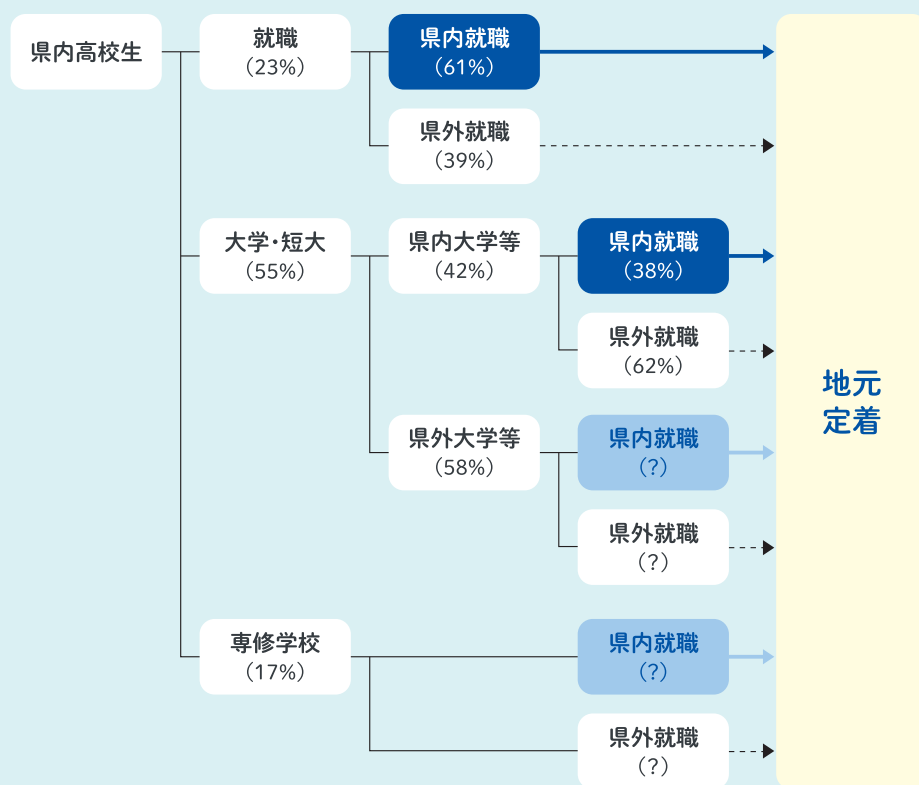
だとすると、若者が地元に残らない、あるいは帰ってこない理由は、地元の良さを知らないからではありません。「そこが彼らにとっての『ふるさと』になっていないから」なのです。

地域探究学習などで、大人が誘導して地域の良さを教え込んでも、残念ながら地域への愛着は育ちません。その人自身の意思が発揮されることが、何より大事なのです。

\ CHECK! /

県外に進学・就職する生徒に、どう「地域への意識」をもってもらうか

● 地元定着への旅路 (各数値は令和7年度の概算であり、あくまで参考値)



(例) 青森県の場合

- ・高卒時に県内就職する子は14%
- ・県内大学等へ進学し、県内就職する子は9%
- ・つまり、新卒時に“地元定着”する子は $23\% + a$
※ a =県外大学からの県内就職など



地元定着には

「県外に進学・就職する高校生に、どう将来的なUターン希望や地域への意識をもってもらうか?」を考えることも重要

出所:「高等学校等卒業者の進路状況」(青森県教育委員会、令和7年度データ)より抜粋・加工
「あおり人材育成・県内定着促進協議会・令和8年2月12日会議資料」より抜粋・加工

選んでそこにいる人の背中

では、生徒たちが主体的に地域に関わっていくための「最初の一步」として、どんな機会が必要でしょうか。生徒の「意思」は、選んでそこにいる大人の生き様に触発されることで芽生えます。だからこそおすすめしたいのは、先生ご自身が「この人の生き方は面白い」「この人の話なら、自分の生徒にぜひ聞かせたい」と心から思える、意思をもった地域の大人と、生徒たちを出会わせることです。

こう話をする、多くの先生方から「うちの地域には、そんなロールモデルがない」というお悩みを聞きます。しかし、華々しい実績をもつ人や、大きなプロジェクトを立ち上げたリーダーのような人でなくてもいいのではないのでしょうか。

生徒に会わせるべきは「今、ここにいること」を自分なりに意味づけしている大人です。「自分はこの地域から出られないのだろうな」と嘆くのではなく、目の前の仕事や暮らしに、自分なりの意味をもち、肯定できている人。「なぜ、自分はここにいることを選んだのか」「どんな葛藤を抱え、それをどう咀嚼して今を生きているのか」を、飾らずに自分の言葉で語れる人です。そうした大人の迷いも含んだリアルな話こそが、生徒の心に深く刺さり、「ほう」と目を輝かせる瞬間を生み出します。

そうした大人を見つけるには、『笑っていい



とも!』のテレフォンショッキング方式が有効です。同僚の先生方に声をかければ、少なくとも一人くらいは「意思をもってこの場所で生きる、地域の大人」を知っているはずです。その人に会いに行ったら、さらにその人から別の人を紹介してもらいます。面白い人の周りには、面白い人が集まっているものです。

そして、忘れてはならない存在があります。

日々生徒と向き合っている先生方ご自身もまた、「意思をもってそこにいる大人」の一人です。

赴任のきっかけは偶然やなりゆきだったとしても、今「ここにいる」と自ら選び、日々の生々しい葛藤や喜びと向き合いながら教壇に立っていらっしゃるはずです。なぜ自分はここで教員をしているのか。ご自身の「ここにいる意味」を言語化し、ぜひ生徒たちに語ってあげてください。

意思のある大人の背中を見て、自分だけの「納得解のルール」を作り始める一。こうした経験の蓄積が、生徒たちが将来どこへ行こうとも、いずれ自分の意思で地域へと関わっていく「ローカルキャリア」の出発点となるはずです。

生徒に
会わせたい
ロールモデルは

「意思をもってそこにいる大人」との出会いが、
心に火をつける

REPORT

民間、行政、学校一体の地域づくり、人づくり～山形県遊佐町^{ゆざまち}

大人の本気が 地域と生徒の明日を照らす

山形県の最北端、県の形を人の横顔に例えると「おでこ」の位置に遊佐町はある。
鳥海山から湧き出る豊かな水が田畑を潤し、日本海に沈む夕日が庄内平野を染め上げる。

平成の大合併の折、隣接する酒田市へ吸収されることなく自立の道を選んだ
人口1万人強の自治体が今、地域づくりで注目を集めている。何が人を惹きつけるのか。

10代をこの町で過ごした若者の話を出発点に、関係者を取材した。

取材・文／堀水潤一



少年議会がつなぐ未来のバトン

自分の手で町は変わるという実感

国政選挙の投票率の高さで知られる山形県。なかでも遊佐町^{ゆざまち}における若年層の投票率が高い。その遠因と言われるのが2003年度に始まった「遊佐町少年議会」の存在だ。「これからの町づくりをしていくのは若者」という小野寺喜一郎 元町長の信念の下で始まった模擬議会であり、町在住・在学の中高生を対象に、立候補または選挙で選ばれた少年町長・少年議員が本格的な議会運営を行う。似た制度をもつ自治体もあるが、歴史は古く、年間45万円の予算がつくなど独自色が際立つ。半年間毎週のように活動が続き、年3回の少年議会で審議された案は実際に政策化される。例えば、町のイメージキャラクターの募集や音楽イベントの開催など。街路灯や雪よけ柵の設置など予算に収まらない要望は町の事業として実現することもある。

しかし、近年こそ立候補者が増え、23期

の累計で議員数は273人にのぼるが、長らく定員確保が課題で、2020年代に入るまで選挙になることはほとんどなかった。その過渡期に3期連続で少年町長を務めたのが齋藤愛彩^{あや}さんだ(写真下)。遊佐中学校2年生のとき初めて少年議員となり、羽黒高校(山形県鶴岡市)在学中の3年間を少年町長として過ごした。大学を卒業した現在は社会人2年目にあたる。何が彼女を突き動かしていたのだろうか。

「以前は都会に憧れ、何もない遊佐に生まれたことを不幸とさえ思っていました。でも少年議会に入り、町をPRするパンフレットを制作するため町内を巡ったところ、退屈に思っていた景色が変化し、魅力に気づいたんです。周囲の大人が子ども扱いせず、一人の人間として扱ってくれたことも嬉しく、活動にのめりこんでいました」

そして数々の政策を実行する。1時間に1本の電車を待つ高校生が邪魔にならないようホームにベンチを設置したり、町立図書館に、会話をしながら学習できるスタディスペースを設置したり。後者のきっかけは少年議会の視察にきた社会起業家と話すなかでユースセンター(中高生のための第三の居場所)の概念



年3回開催される少年議会には、遊佐町長、副町長、教育長、および各課長が出席。写真は、第23期の第三回少年議会の様子(遊佐町提供)。



古窯ホールディングス
元遊佐町少年町長
齋藤愛彩^{あや}さん

(右)鳥海山の伏流水で満たされた「丸池様」。エメラルドグリーンの水面を鬱蒼とした樹木が覆い神秘的。(左)町内のあちこちにある湧水スポット。



を知り、必要性を痛感したことだ。とはいえ大掛かりなことはできない。そこで、生涯学習センターに試験期間限定の自習場所を設け、ニーズがあることを実証したのち、図書館での常設につなげた。こうした活動を通じ彼女は「自分たちの町は、自分たちの手で変えられる」という実感を得る。

JRへのダイヤ改正の要望など、実現しなかった政策もあるが、役場の担当者は背中を押し続けた。だからか、思ったことを即行動に移す習慣がついた。コロナ禍、高校が休校になった際、少年議会とシビックプライドの関係を論文にしようと思い立った際は、制度の生みの親である小野寺喜一郎元町長に電話をかけヒアリングをした。

「祖母が知り合いらしく、『喜一郎さん、孫の愛彩です』と連絡をしたら、喜んで創設時の思いを語ってくれました」

こうした濃密なつながりや、名前呼び合える距離感こそ、この町がもつ大切な資産だろう。この後に登場する人物の多くも、実は恩師と教え子だったり、あるときは助け、あるときは支えられる関係だったり、幾重にも重なる縁で結ばれている。

地域みらい留学制度の始動

齋藤愛彩さんが少年議会の活動を始めたころ、町唯一の高校、山形県立遊佐高校では定員割れが深刻化。そこで、小野寺元町長の任期満了後、強いリーダーシップを発揮

Point of View ①

町・行政の想い



大人の世界に触れながら成長

遊佐町教育委員会
教育長
土門 敦さん

少年議会やデュアル実践を通して、自分で課題を見つけ解決するプロセスを経験することは、社会に出てから財産になるはず。大人の世界に触れながら成長していける環境を町として提供し続け、発展させていきたいです。町内に5校あった小学校は2023年4月、1つに統合しました。これで町内の小中高は1校ずつになり、より一層の連携がしやすくなりました。県外生の受け入れは、町民や小中学生の刺激となり、今後も町に活力をもたらしてくれるものと期待しています。



受け継がれてきた主権者教育

遊佐町長
松永裕美さん

この町には小さな自治体ならではの濃密なコミュニティがあります。また、大人への忖度なしにやりたいことを突きつめる中高生のエネルギーで満ちています。その象徴が少年議会。先々代の町長の時代から連綿と受け継がれてきた町の主権者教育の根幹です。議場が大人だけのものではなく、未来を担う若者の本音が飛び交う言論の場となっている光景は、まるで遊佐のパワースポット。遊佐町は、失敗を恐れず挑戦する若者を応援し続ける町です。



していた時田博機 前町長が決断したのが「遊佐町自然体験型留学生制度」の導入だ。各地で広がっていた地域・教育魅力化(高校魅力化)における国内留学のプラットフォーム、いわゆる「地域みらい留学」のことで、県外出身の生徒が親元を離れ、町の支援の下、遊佐高校に通う制度である。

時田前町長から相談され、遊佐高校魅力化プロジェクトの中心人物になるのが、当時20代半ばの藤川かん奈さん(写真左上)だ。京都で多世代が集う地域コミュニティを運営した後、遊佐へ移住。地域おこし協力隊として生涯学習に関わる傍ら、アパレルブランドを立ち上げた起業家でもある。「廃校阻止のために力を貸してほしいと言われたけど、どうしよう」とSNSに投稿したところ、親交のあった山形大学出身の二人から、「絶対やるべき」という前向きな反応があがった。一人は、東京のIT企業を経て庄内地方に戻り起業直後だった伊藤大貴さん(写真左下)。もう一人は、数学教師を目指すも教育との関わり方を模索していた鈴木晴也さん(写真39ページ右)だ。たまたま人生の節目にいた二人は、自分たちも協力したいと、導かれるように遊佐に集結した。

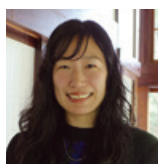
一方、高校側のキーパーソンが、当時教務主任で今は教頭を務める近藤信司先生(写真35ページ左)だ。演劇経験を活かし、中学生向けの説明会で表現豊かに場を和ませたり、文化が異なる学校と外部人材の橋渡しをしたり。中学生にインパクトを与えたのが2019年夏に開催された2泊3日の体験プログラムだ。鳥海山や日本海を舞台に、藤川かん奈さんら大人が遊ぶように働く姿に、中学生の心は動いた。そして、関係者の予想を上回る5人が入学を決める。こうして、廃校の危機にあった高校は、選ばれる学校へ転換する一歩を踏み出した。

少年議会に吹いた新しい風

2020年3月、空き家を改装した寮に、5人の1期生が引っ越してきた。そこに、噂を聞きつけた2学年上の地元の高校生が訪れる。当時3期目の少年町長を目指していた、あの齋藤愛彩さんだ。

「遊佐の人間とは違う視点をもっているだろう県外生に、絶対に少年議会に入ってもらいたい、と直談判に行ったんです」

その熱意に押され、安藤希祥さん(写真右上)、小川萌衣さん(写真右下)ら3人が、第



合同会社Oriori 代表
一般社団法人
遊ばざるもの学べからず 代表理事
藤川かん奈さん



東北公益文科大学4年
元遊佐町少年副町長
安藤希祥さん



合同会社dano 代表
一般社団法人
遊ばざるもの学べからず 理事
伊藤大貴さん



東北公益文科大学4年
元遊佐町少年議員
小川萌衣さん

18期少年議会のメンバーに加わった。ただ、アクティブな小川萌衣さん(後に、学校の敷地に畑を作ろうと画策し、地域の人を巻き込み重機を運び込む騒動を起こす)をはじめとした少年議員15人と比べ、安藤希祥さんは声も細く、消極的であった。

「何かしたいとは思いつつ、ひきこもるために遊佐に来たようなところもありました。見学に来たときも、寮の個室の様子とWi-Fiのスピードを確認することが最大の目的でしたし(笑)」と安藤さんは振り返る。

齋藤愛彩さんは、そんな彼を敢えて少年副町長に指名した。

「お節介な性格上放っておけなくて、意図的に役割を振ったり、発言を促すなど、当事者意識を引き出すようにしていました」

彼女のエネルギーを体いっぱい吸収したこと、また、県外生の寮暮らしをサポートするハウスマスター(当時、鈴木晴也さん)と、深夜のキッチンで腹を割って話したことなどで、彼の心は開かれていく。後に、3期連続の少年副町長、さらに遊佐高校の生徒会長も務めることになることは、まだ本人さえ想像できていない。

遊佐高校魅力化推進計画の策定

試行錯誤が続いていた遊佐高校の魅力化も、2023年ごろになると、多様な人や組織が噛み合い回転し始める。当初教育委員会主管だったプロジェクトが、町長部局の企画課に移ったタイミングで「遊佐高校魅力化推進

計画」が策定され、町としての県立高校支援を明確化。また、2023年度に鈴木晴也さんが、翌年度には加えて下村俊太郎さん(写真39ページ左)が教育コーディネーターとして正式採用されたことで、遊佐高校における探究やデュアル実践(後述)など独自のカリキュラムも進化し始める。

さらに、2024年10月には、藤川かん奈さんが代表を務める一般社団法人「遊ばざるもの学べからず」が設立。町教委、企画課、産業課の枠を超え、若者を軸とする人材育成施策を受託。高校魅力化起点での町づくりも始まった。

依然として少子化は進むものの、今も遊佐高校は年5人ほどの県外生を迎えている。2022年度から遊佐高校の魅力化推進を担当している企画課の瀧口めぐみさん(写真下)は話す。

「当初、高校生がこんな遠いところまで来てくれるなんて信じられませんでした。空の広さや満天の星空、食材のおいしさに感動する姿を見て、当たり前で気づかなかった遊佐の良さを教わりました。役場の立場としては定住につながるといいのですが、個人的には進学や就職で町外に出たとしても、何らかの形で接点を持ち続ける関係人口になっていただければ嬉しいです」



遊佐町役場
企画課 主任
瀧口めぐみさん

Point of View ②

山形県立遊佐高校の想い



地域の方々が出入りする開かれた学校

【池田貴之 校長】今年度本校の校長に着任して、まず感じたのは、教職員ではない多くの方々が頻繁に出入りしていることでした。職員室には、2名の教育コーディネーターの席が配置され、「観光ビジネス」や「ジオパーク探究」といった授業には、専門性を備えた地域おこし協力隊の方たちが協力してくれています。同授業を担当する商業科の後藤正樹先生も、「若い人、外部の人ならではの発想に気づきもらっている」と話しています。先日、生徒に誘われて校外学習についていったところ、教員と外部人材を合わせた大人の数が、生徒とほぼ同数だったのには驚きました。

役場や商工会の方々、民間の事業所を含め、こうした

外部人材との良好な関係は、県のモデルケースとして紹介されることもある本校の特色ある学校運営の柱です。長年にわたって築かれてきたこの関係を大切に育てていくことが私に課せられた役割だと認識しています。

【近藤信司 教頭】酒田市出身の私は、高校時代は山岳部で鳥海山に登り続けてきました。しばらく県の内陸部に住んでいましたが、遊佐高校勤務の辞令が出て、20年ぶりに鳥海山が見えるこの地に戻ってきたときはハンドルを握る手が震えたほどです。本校の魅力は、一人ひとりの表情が見えること。「あの生徒は、うちの学年じゃないから関係ない」とは決してなりません。人懐っこい生徒たちに囲まれ、毎日を過ごす幸せを噛み締めています。

昨年卒業した県外留学生が、報告会で遊佐の思い出や感謝の言葉を述べた際、一様に「最初のころはホームシックで泣いてばかりだった」と話していました。学校では活発で、そんな気配は感じなかった生徒たちです。人知れず辛い思いもしながら地域の人に支えられがんばっていたことを思うと目頭が熱くなりました。地元の生徒も、そんな県外生を見て、自分たちも成長しなきゃと刺激を受けています。



左から、近藤信司教頭、池田貴之校長、後藤正樹先生。(撮影／米屋健吾)

\ Student's Voice /

「デュアル実践」を経験して得たこと

「事業所の方からは、仕事の幅や奥深さを教えていただきましたし、遊佐で一緒に働く仲間を増やしたいというお気持ちがあることを知りました。本業のお仕事を遅らせてまで対応していただき感謝しています」(石垣風卓さん@ゆざ食彩工房)。「自然が好きで観光の仕事を選択しました。飛行機の予約などの手続き業務ができたのは貴重な経験になりました。PRポスター制

作では自分のイメージを形にでき達成感を得ることができました」(森岡皇士郎さん@遊佐鳥海観光協会)。「お客さまに無料でハンドマッサージをする技術面と、どうPRすれば商品を買いたいと思ってもらえるかという販売面の課題の両立に悩みました。仕事は自分で作るもの、という教えも印象に残っています」(松本杏彩さん@ボディケアサロンCanana)



石垣風卓さん(3年)



森岡皇士郎さん(3年)



松本杏彩さん(3年)

「デュアル実践」10年の実績と課題

地域を教室に変える大人たち

地域みらい留学が注目されるが、遊佐高校の改革は以前から始まっていた。普通科から、教養系列・地域共生系列をもつ総合学科へ改編した2015年度の翌年には、実践型長期インターンシップ「デュアル実践」がスタート。地域共生系列の2年生が半年間、毎週水曜の終日、町内各地の事業所で実習を行う。近い将来の自分たちのキャリアを描く貴重な時間だ。

取組の土台を築いたのは、商工会と役場の産業課だ。前例のない長期実習に困惑する事業所を一軒ずつ回り、協力を求めた。現在、産業課で同事業を担当する伊藤正美さん(写真下)は苦労や意義を語る。

「産業課としては、単なる職場体験ではなく、人材確保や地域貢献につながることを期待して事業所に協力をお願いしています。役場も事業所の一つとして生徒さんを受け入れますが、福祉や教育など多岐にわたる部署の業務を経験してもらうことで、『役場が自分たちの生活に、これほど関わっているとは知らなかった』という声ももらいます」

協力事業所にもそれぞれ、高校生を受け



(上)デュアル実践翌日のリフレクション会の様子。担当は教育コーディネーターの下村俊太郎さん。(中)田植えを手伝う教育コーディネーターの鈴木晴也さんたち。(下)中高生のサードプレイス、遊佐駅前の「おでこBASE」にて。



遊佐町産業課
産業創造係
係長
伊藤正美さん

入れる明確な理由がある。ボディケアサロン Cananaを営む^ね津^つ香奈さんは、生徒を“一人の経営者”として扱う。「雇用されるだけが仕事ではなく、自分次第で仕事は生み出せる」という起業家精神を学んでほしいからだ。また、遊佐企画の遊佐亮太さんは、空き家を再生した宿泊施設の開業準備を進めており、そこを実習の舞台とした。町議としても関心を

もつ空き家問題を若い世代と考えたいからだ（詳細は下段）。

リフレクション会と成果発表会

実習翌日の木曜放課後には、教育コーディネーター主導のリフレクション会が行われる。グループワークを通じて「何が起き、どう感じたか」を語り合い、体験の言語化を促す取組

Point of View ③

デュアル実践協力事業所の想い



ボディケアサロン Canana
代表
津^ね津^つ香奈さん



受け入れ初年度に津^ね津^つさんが作成した綿密な計画書。

デュアル実践の受け入れは今年で4年目。地元の子もいれば県外生もいるし、性格も一人ひとり違います。接客が苦手な子には、技術習得で自信をもたせるなど、その子の特性や長所を活かす工夫をしています。私自身、教え方や接し方を学ぶ機会になっていますし、毎回「もっとこうすればよかった」という反省や発見があります。よく、地方には仕事がないと言われますが、どこに住んでいても「自分の腕次第で仕事は生み出せる」という選択肢があることを、ここでの実習を通じて高校生に知ってほしいです。



日本海運輸
し^ろぎ
谷^や 浩^はさん(右)
谷^や 春^は樹^きさん(左)

当社は運送業ですが、高校生に運転はさせられないため、タイヤの交換やホイールの塗装、洗車などを通じ仕事に対する責任や誇りを伝えています。トラックを美しく保つのはお客さまに安心を与えるのと同時に、ドライバー自身の自覚を促すため。生徒1人に2人のスタッフが付くこともあり負担は少なくありません。協力を始めた11年前は「採用につながれば」という思いもありましたが、今までそれはかなわずです。それでも続けるのは、若い世代の感覚に触れられるから。遊佐で育ち、遊佐で商売を始め、遊佐の道を使わせてもらっている以上、道を掃除するのと一緒に、恩返し的心で協力しています。



遊佐企画
代表取締役
ゆ^ゆさ 亮^{りやう}太^たさん

遊佐町には約4800世帯に対して昨年末時点で600軒以上の空き家があります。この深刻な問題を考えるため、自ら空き家を再生し、宿泊施設として開業する準備をしています。残置物の処理など想像以上の出費や労力がかかりますが、貴重な経験です。実習に協力したのは、この問題を私1人でどうにかするのではなく若者と考えたから。期待しているのは、遊佐高校に「空き家リノベ部」ができること。社会課題の解決に高校生が関わり、町の活性化につながるような理想を思い描いています。



遊佐町立図書館
館長
齋^{さい}藤^{とう} 守^{しゅん}敏^{みん}さん

県外生を含む高校生を受け入れる際、大切にしているのは、遊佐に馴染んでもらいたいということ。図書館の業務そのものよりも、町民との接し方を学んでほしい、町そのものを好きになってほしい。私自身遊佐で生まれ育ちましたが、県外勤務や単身赴任も経験した分、この町の良さを認識していますから。そのため、図書館内に留まらず、まちづくりセンターという町内6地区の拠点など、普段は足を踏み入れないエリアにも生徒を連れ出しています。

だ。他者の視点に触れることで自身を客観視し、次週に向けた意欲を育む。9月末に開催される成果発表会はその集大成だ。ポスターセッション形式で、仕事の内容だけでなく、半年間を通じた心の葛藤や変化をグラフにしながら自分の言葉で実習を振り返る。近藤信司教頭は、こう話す。

「地域みらい留学の1期生と関わったあと、私は一度遊佐高校を去り、教頭として戻ってきたのですが、リフレクションを充実させたことで成果発表会のレベルが格段に上がったことを感じます。半年間の実習中に生じた『今回はがんばれた』『今日は辛かった』という感情の上がり下がり言語化しておくことで、半年後の発表にも気持ちがこもり、生き生きと伝わるんです」

発表会には、事業所、保護者、教育関係者に加え、遊佐中学校(石黒 久校長)の3年生約100人がバスをチャーターして見学にくる。こうした交流は、一時期落ちこんでいた地元中学校から遊佐高校への進学率が回復する契機になっている。また、実習先に就職する例もあるなど、生徒の地元でのキャリア実現にもつながっている。

ただし課題もある。行政には予算や公益性、学校には教育課程やリスク管理、民間には本業との兼ね合いなどの事情があり、切

り取る箇所によっては濃淡も生じる。

それに対して、事業所と学校のパイプ役を自認する地域おこし協力隊の松尾尚記さん(写真右下)は次のように話す。

「立場によってズレが生じるのはごく自然なこと。直接は言いにくい本音を拾い上げ、遊佐の若者を育てるという共通の目的に向けて対話を重ね、調整していくのが私の仕事です。私自身、町の方針とすべての考え方が完全に一致しているわけではないかもしれませんが、けれど、異なる考え方をもつ大人が、それぞれの立場で関わることも、生徒のキャリア観を広げることになると思います」

課題感について、藤川かん奈さんも話す。

「今の遊佐は、自然や食や人や教育資源に恵まれた豊かな町です。だけど豊かさは放っておいて続くものではありません。現状に満足してはいつかダメになってしまう。課題意識をもって動き続けることが、本当の郷土愛なのだと思います」



最後に、本稿前半に登場した3人の高校生の現在地を記しておこう。

地域みらい留学1期生の小川萌衣さんは現在、遊佐から通える東北公益文科大学の4年生。藤川かん奈さんの会社のインターンを務めながら、全国の中高生に自身の体験を



遊佐中学校
校長
石黒 久さん



地域おこし協力隊
な お き
松尾尚記さん

発信したり、地域みらい留学制度のPRを行っている。八面六臂の活躍ぶりで、企画課の瀧口めぐみさんや遊佐高校の近藤信司教頭ほか、地域の人たちの信頼も厚い。

同じ大学に進学した安藤希祥さんは、遊佐駅前の空き物件を改装した中高生のためのサードプレイス「おでこBASE」を運営している。カウンター越しに接客する彼から声の小ささは感じない。大学卒業後は遊佐を離れることも検討中。成長するためには、居心地が良くなってきたこの場所を一度飛び出す必要を感じているからだ。

元少年町長の齋藤愛彩さんは、こうした後輩の活躍を頼もしそうに見つめる。

「私が遊佐で作りたいかったことの一つ、中高生の居場所=ユースセンターは、若者が主体的に運営するという理想的な形で安藤君たちが実現してくれました。遊佐高校を中心に、積極的な若者も増えています。だから私が遊佐にいる必要もないんです」

そう語る彼女は昨年、東北芸術工科大学を卒業し、県内の大手観光グループに就職した。入社2年目に向けた上司との面談では温めていた新規事業を提案。県内の高校を対象に探究学習を支援する「まちの探究ラボ」という事業だ。プロジェクトリーダーとなった今年度は、内陸にある本社と、この事業のために彼女の地元を設置されたサテライトオフィスとの二拠点での働きを両立している。齋藤さんにとって、「地域で働く」とは、一つの自治体に留まることではない。

「遊佐は、中高時代の私に『自分が暮らす地域にとって、自分は意味のある存在なんだ』という感覚を育んでくれました。だから今、どこで働いていても自分は活躍できるし、発言権があると思っています」

そして、「将来、必ず町長として遊佐に戻ってきます」と宣言する。自分の手で社会は変えられるという感触を得た24歳の若者にとって、遠い未来の夢ではない。

Point of View ④

コーディネーターの想い



誰もが教育の担い手になれるはず

教育コーディネーター
下村俊太郎さん

東京で6年高校教員をしていましたが、「違う形で教育に携わりたい」「自分の力ではコントロールしがたい自然の中で暮らしたい」という思いから2024年に移住しました。現在、教育コーディネーターとして遊佐高校の探究の充実などに関わっています。また、趣味のイラストや漫画で遊佐の魅力を発信しています。生徒には、教師ではない大人が当たり前のように学校にいる景色を通して、地域にはいろいろな人がいることを感じてほしいです。



遊佐を安心して挑戦できる場に

教育コーディネーター
一般社団法人 遊ばざるもの学ぶべからず 理事
鈴木晴也さん

高校数学の免許を取得したものの、教員ではない教育との関わり方もあるのではと考え、大学院を中退し遊佐にきました。地域おこし協力隊として3年間、県外生の寮での暮らしに寄り添い、2023年度からは遊佐高校の職員室に席をいただき、教育コーディネーターを務めています。この町でつくりたいのは、居心地が良いコンフォートゾーンではなく、安心して外の世界に挑戦でき、けれどいつでも帰ってこられるセキュアベース(安全基地)です。



地域とともに 未来をつくる 高校事例

地域に根ざした仕事や活動がしたい。地域のつくり手になりたい。
本企画では、そんな生徒の思いを引き出す教育活動に取り組み、
地域とともに未来をつくることに挑戦している学校を紹介します。

CASE 1



八重山商工高校
(沖縄・県立)

CASE 2



都城商業高校
(宮崎・県立)

八重山商工高校 (沖縄・県立)

学校
DATA

1966年創立／機械電気科(機械コース・電気コース)、情報技術科、商業科(会計システムコース・情報ビジネスコース・観光コース)／進路状況(2026年3月卒業)大学24人、短大1人、専門学校42人、就職56人、そのほか(台湾留学)1人／Instagram「八重山商工高校」(@yaeyamasyoko)

自分たちの島は、自分たちで変えていく。 地域を知り地域を愛す、つくり手を育てる



写真後方左から、商業科観光コース長の儀間政樹先生、進路指導部主任の崎山錦士郎先生。写真前方左から、商業科観光コース3年の上原えりさん、宮良美都子さん、東長田千尋さん。

地域を知り関わることが、 将来、行動を起こす原動力に

沖縄県の西端、八重山地方の中心地である石垣島にある八重山商工高校は、商業系3コース、工業系3コースを有する専門高校。教育方針の一つに「貢献」を掲げ、地域連携・地域貢献を通して自己の社会的な役割やあり方を深める教育を行ってきた。自身も石垣島出身の進路指導部主任・崎山錦士郎先生は、地域や学校が抱える課題や生徒の様子について次のように話す。

「八重山地域においても、少子化に伴う地域

の担い手不足は課題になっており、我々も危機感をもっています。特に、地元出身の人間が積極的に参画し、地域を支え盛り上げることが大事であり、同時に現状の課題でもあると感じています。一方、生徒たちは概して地元愛が強く、進学・就職で一度島を離れても、いずれは戻ってきたいと考えている子が多いです。地域で何をしたいのか、地域をどうしていきたいのか、地域にどう貢献できるかといったことを高校時代に深めることで、将来、島に戻ってきたときにアクションを起こす原動力につなげてほしいと考えています」

その素地をつくるためには、まずは地域のことをよく知らないといけない。そうした考えから、同校では地域に根ざした学校設定科目を多く設けている。例えば、「沖縄の歴史」「郷土の自然」「郷土の芸能」「郷土の音楽」「郷土の舞踊」などがあり、選択する生徒も多い。また、郷土芸能部も多くの部員を抱え、島の行事など地域で活躍する場面も多い。

6つのコースのなかでも特に八重山の自然・文化・芸能を学ぶことに注力しているのが、商業科の観光コースだ。先述の科目に加えて「ネイチャーツーリズム」が必修科目となっており、

3年間を通して英語に加えて中国語を学ぶ。

「八重山地域にとって観光業はとても重要な産業であり、観光を専門的に学んだ担い手の育成は不可欠です。距離的に近い台湾との交流もあり、中国語を身につけることはアドバンテージになるだろうと、中国語教育については30年以上前から取り組んできました。中国語の発表会やスピーチコンテストの全国大会で上位に入賞する生徒（後出の上原さん、東長田さんも受賞）や、卒業後に中国や台湾の大学に進学する生徒も出ています」（崎山先生）

深く知ること、地元愛を課題解決力に進化させる

観光コースでは、「八重山の伝統文化を観光資源に」をテーマに、昨年度から探究的な

学びに力を入れ始めた。コース長を務める儀間政樹先生は、沖縄本島の出身者。同校に赴任した際、地元・八重山に誇りをもつ生徒が多いことに感銘を受ける一方で、課題も感じたと言う。

「地元への誇りや愛情は強いのですが、八重山の自然や伝統文化・芸能などについて深く知らない生徒が多い印象でした。せっかく思いがあるのだから、地元のことを語れるようになってほしい、地域のために行動ができるようになってほしい。卒業後すぐにではなくても、八重山で生まれ育った子どもたちが八重山の課題を解決できるようになってほしい。そんな思いから、生徒に探究的な学びの場を提供したいと考えました」（儀間先生）

「机上での学びだけではなく、実際にフィール



【右上】台湾の学校との交流の場で、伝統舞踊を披露する観光コースの生徒たち。【左】マーケティング部ではスマムニ（島言葉）の観光資源化に取り組む。自作のアニメーション（右下）を観光客に視聴してもらい、アンケートを実施。観光に活かす施策を検討している。

ドに出て、いろいろな人と出会い、話を聞いて、島の現状を肌で知ることがまずは大事」と崎山先生。今年度は、石垣市や建設会社と協働して行ったビーチクリーン活動やゴミ処理場の見学、旅行事業者と連携してのバスガイド実習、「スマムニ（島言葉）」の調査・発信、川平湾やバナナ公園などでのフィールドワークなど、授業や課外での体験を通して島の魅力や現状を知る機会を多く設けている。

例えば、バスガイド実習では、県外からの修学旅行生のバスツアーに観光コースの生徒らが2人1組で同乗し、ガイドを務める。道中では三線や手話も披露する予定だ。訪れる場所はあらかじめ決まっており、生徒はそのスポットについて調べ、話す内容を自分たちで考える。現在、原稿を作成中だという観光コース3年の宮良美都子さんは、「ガイドをするために調べるなかで、石垣のことを知っているようで知らなかったんだと気づかされた。自分たちにとっても勉強になっている」と言う。また、同・上原えりさんも、「地元こんな素敵なおところがあったんだとわかり、石垣の魅力を観光客の方々にももっと知ってほしいと思った」と続ける。

同・東長田千尋さんは、漂着ゴミを拾うビーチクリーン活動や自然の中でのフィールドワークを通して、「石垣の豊かな自然を残していきたいと強く思った」と言う。そして、ビーチクリーン活動を個人で続けている人の話を聞き、「自分に何ができるかはまだわからないけど、まずはボランティアに参加したい」と今の気持ちを語る。



【上】ビーチクリーン活動の様子。同日午後には、漂着プラゴミを使ったアップサイクル商品のアイデア出しを行った。【下】理科や社会の授業では、八重山の自然や地理を知るためのフィールドワークを実施。

豊かな自然や文化を残し、 島の人が活躍するまちに

「地域側にも高校や生徒との連携に対して高いニーズがある」と儀間先生。石垣島は、各種スポーツの合宿や学校の研修旅行等での来訪者も多く、そうした団体との交流会・発表

会やまち案内の機会が舞い込むのは日常茶飯事だ。「学校の教育目標や方針と合致する限り、声がかかればできるだけ受けるようにしている。その結果、観光コースの生徒たちは、島内外のさまざまな人とふれあう機会が多くなっている」と言う。

島内での交流に加え、研究発表会や中国語の大会などで島外・県外に出る機会もある。宮良さん、上原さん、東長田さんとも、都市部のいわゆる「キラキラした世界」を知り、少しはうらやま気持ちがありつつも、「石垣には必要ない」と断言する。「大人たちには、島の自然や文化をもっと大切にしてほしい。ゴルフ場や全国チェーンの飲食店はいらない。こんなにきれいな海や山があるのに、どうしてそういうものが入ってくるのだろうかと思う」と宮良さん。そして、3人が共通して望んでいるのが、「もっと島の人が活躍するまちになってほしい」ということだ。街なかの洒落た店舗は移住者が経営しているケースが少なくなく、「なんだかモヤモヤする」と言う。そんな彼女たちの言葉を、崎山先生は次のようにフォローする。

「自分たちの故郷が、知らないうちに変化させられているような感覚なのだと思います。自分たちの島だから、変えていく主体は島の人間で

ある自分たちでありたい。そんな意識の芽生えを感じます」

最後に、3人の生徒たちに、卒業後の夢や目標を聞いた。幼い頃から三線や伝統舞踊を習ってきたという宮良さんは、「三線を弾ける人も踊りを踊れる人も減っているのに、芸能の道に進み、伝統芸能を継承していきたい」、中国語が好きだという上原さんは、「大学に進学して中国語を学び、語学を活かして石垣で観光の仕事がしたい」、語学が得意だという東長田さんは、「外国語大学に進学して英語と中国語を学び、空港のグランドスタッフとして働きたい。そして、いつか石垣に戻ってきたい」と、話してくれた。崎山先生は、そんな生徒たちに寄せる思いを込めて、次のように締め括った。

「私たち教師にできるのは、生徒に社会、世界への扉の入口を提示すること。扉を開いてその先にアクセスするのは生徒自身であり、郷土への思いを軸足にして、広く社会全体を捉えられるようになってほしいと考えています。そして、稼ぐ力だけでなく、八重山の豊かな自然や文化の価値に気づき、大好きな故郷を守りたいという純粋な気持ちを抱いてほしいと願っています。それが、本当の意味での生徒自身の幸せにもつながると信じています」

都城商業高校
(宮崎・県立)

生徒の「やりたい」を起点に、 地域と関わりイノベーションを起こす

学校
DATA

1904年創立／商業マネジメント科、情報ソリューション科／進路状況(2026年3月卒業) 大学46人、短大10人、専門学校55人、就職42人／Instagram「のくにラボ」(@nokuni_lab)「紙漉き文化再生プロジェクト」(@re_mknj_washi)



写真左から、商業マネジメント科3年の田中さくらさん、同・有菌瑛花さん、共創ウェルビーイング部顧問で国語科教諭の北郷晶子先生。

学校外に「出島」をつくり、 地域と新しい価値を共創する

肉と焼酎のまちとして知られる宮崎県都市にある都城商業高校。生徒たちが「やりたい」を起点に地域に飛び出し、地域の人と一緒に地域を盛り上げる活動をしているのが、「共創ウェルビーイング部」だ。「まちのゆるやかなつながりづくり」をコンセプトにした「のくにプロジェクト※」を立ち上げ、地域でワークショップやイベントを開催してきた。活動開始時の部員は4名だったが、4年目を迎える今年度は

30名を超えた。生徒たちの活動を見守ってきた北郷^{ほんごう}晶子先生は、「のくにプロジェクトの存在は、今や地域にとって大きなインパクトのあるものになっている」と言う。

発端は、閉店した校内の売店を復活させようと立ち上がった、有志の生徒らによるプロジェクトだった。かねてより、生徒がやりたいことを応援したい、生徒が地域と関わる取組を後押ししたいと考えていた北郷先生は、生徒が地域の事業者と連携し、共同開発した商品を販売するなど、「生徒たちがイキイキと活動する姿を見て、地域の人と関わる価値を再確認した」と振り返る。

地域の人と生徒と一緒に、新しい価値を生み出したい。みんなの「やってみたい」が掛け合わさったら、想像もつかない場所に辿り着けるんじゃないか。まずは、いろんな人の意見を聞いてみたい。そう考えた北郷先生は、地域の人々と生徒に呼びかけて対話のワークショップを開催。「10年後の都城に、こんなの、どう？」をテーマに語り合った。そこで自分がやりたいことを語ると、「学校の中だけでやるんじゃなくて、外に出しちゃえばいいじゃん」と言われ、ハッとしたという。「学校外に出島的な組織をつくり、そこで生徒

※「のくにプロジェクト」の「のくに」は、宮崎市内にあるアミューズメントパーク「こどものくに」に由来。「子どもだけでなく大人も含めてみんながつながり合えるまちづくり」の意を込めて、「こども」を取り「のくに」と名づけた。

が地域の人たちと新しい価値を生み出し、その価値を学校に取り込む…という流れをつくる」。そんな構想を描き、当時の福祉部を共創ウェルビーイング部と改称し、活動をスタートさせた。

地域の人々が集い、 つながれる場をつくりたい

1年目は、地域の子どもが店長を務めるパン屋さん企画、図書館での紙コップタワーづくりのワークショップなど、「生徒がやりたいことをどんどんやった」と北郷先生。「ゆるさ・ゆらぎ・ゆとりを大切に、年間計画は作らず、ゲスト部員も大歓迎。生徒が気軽に参加できる活動にしたかった」と言う。一方、自身は「ジェネレーター的な関わり方」に徹した。人と人をつなげたり、

生徒が一步踏み出すための仕掛けを考えたりと、「生徒と対等な立場で一緒に考え、活動している」と言い、そのスタンスは今も変わらない。

創部2年目に入部し、現在は部長を務める有蘭瑛花さん（3年生）は、「のくにプロジェクトは、地域とつながりながら、自分がやりたいことができる場」と笑顔を見せる。活動を広げるなか、有蘭さんをはじめメンバーたちは「せっかくイベントで出会ってもその場限りになってしまい、つながりがつukれない」という課題を感じるようになった。「ここに来れば誰かに会えるという場所をつくりたい」という思いからできたのが、「のくにラボ」だ。アイデアをかたちにする難しさに直面しつつ、場所探しから改修・内装まで地域の人々の協力を得て、昨年7月、薬局の跡地を



【左】地域の人と一緒に改装した「のくにラボ」。



【右】特別支援学校の生徒たちとコーヒーワークショップを共催。

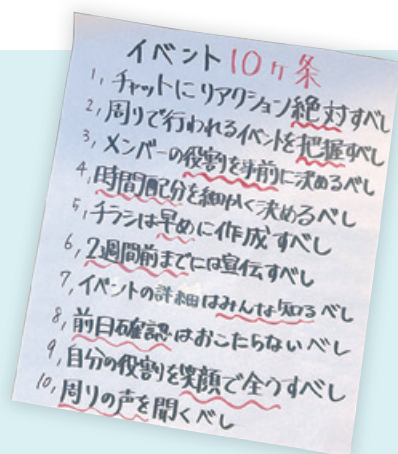
改装した拠点オープン。現在は、生徒主催のイベントや地域の事業者とコラボした企画などを定期的に開催している。

「実験できる場所、失敗しても大丈夫な場所という意味でラボと名づけた。自分たちが考えたことを実際に社会にぶつけてみるのが大事」と北郷先生。実際、「自信満々で地域の人にプレゼンしたらダメ出しをされたこともあるし、イベントにお客さんが全然来なかったこともある」と有蘭さん。失敗から学んだ教訓は「イベント10ヶ条」として共有し、経験を活かし合い改善を重ねている。

のくにプロジェクトを通して地域の人々とふれあい、その笑顔を見るなかで、有蘭さんは「地域の人たちも、集まれる場所が欲しかったのかもしれない」と気づいたと言う。有蘭さん自身は、幼い頃から近所の高齢者の方々にかわいがってもらい、餅つき大会やラジオ体操といった地域のイベントにも参加してきた。しかし、コロナ禍でこうしたイベントがほとんどなくなり、「つながりも希薄になってしまった」と感じている。実際、小学生の妹は地域との交流があまりないそう。「世代を超えて地域の人と人とがもっとつながれたらいいと思うし、将来は、そういう地域の場づくりに携わりたい」と語ってくれた。

消えつつある紙漉き文化を再生。 地域の眠った魅力を掘り起こす

出島的存在であるのくにプロジェクトに対し、そこで得られたつながりや知見を校内での実



践につなげたのが、3年次の課題研究のゼミの一つ「紙漉き文化再生プロジェクト」だ。かつて都城市で盛んだった紙漉き産業の再生を目指し、地域での紙漉きワークショップの開催や和紙を使った商品開発などに取り組んでいる。例えば昨年度は、地元の酒造メーカーと協力し、焼酎の蒸留過程で出る廃棄物を混ぜたリジェネラティブ和紙を開発した。2024年度に県より「循環型社会を実現する環境教育推進事業」の指定を受け、「地域の人との雑談のなかで紙漉きのことを知り、環境教育とかけ合わせたら面白いと思った」と北郷先生は経緯を振り返る。

紙漉き文化再生プロジェクトも、仕掛け人は北郷先生だが、主体になって進めるのは生徒たちだ。先輩たちの課題研究の発表や記録（研究日誌）、動画などから紙漉きの伝統や手法を学ぶことから始まる。田中さくらさん（3年生）は、「先輩たちの活動を受け継ぎたい、紙漉きをやりたい、地域の人とつながりたい」という思いから選択。仲間と試行錯誤しつつ紙漉きの技術を習得し、5月には第一弾として地域の高齢者に向けたワークショップを開催した。

プロジェクト活動を通して「消えつつある地



【左】今年5月に開催したワークショップでは、先輩たちから受け継いだ「紙漉き文化再生プロジェクト」の取組についても紹介。【右】楮（こうぞ）や水の量を調整し、記録をつけながら紙漉きに励む生徒たち。

域文化の再生に携わっているんだという誇りが生まれた」と話す田中さん。紙漉きのことを伝えたい、という思いでワークショップに臨んだ。一方、高齢者と話をするなかで、「昔は障子の張り替えのときに、剥がした和紙を溶かしてもう一度和紙に漉き直していた」と教わり、「紙漉き文化の知見がまた一つ増えた」と言う。

人前で話すのが苦手だったが、ワークショップやその準備をするなかで、「地域の大人や高齢者の方と話す機会が増え、自分にはない考え方や見方を知ることができた。人と話すことで視野が広がり、自分も成長できるんだと感じ、地域の人ともっと話してみたいと思うようになった」と自身の変化を語る。地元・宮崎が大好きだと言い、卒業後は宮崎大学地域資源創成学部で地域と経営について学び、将来は「宮崎の人がずっと住み続けたいと思えるまちをつくる仕事に就きたい」と話してくれた。

こうした取組により、同校は第14回キャリア

教育推進連携表彰で最優秀賞を受賞した。実際、卒業したのくにプロジェクトの初代メンバーは、ソーシャルイノベーターや地域の魅力を発信する編集者、地元の高校生と関わる仕事などに関心をもち、それぞれの道を歩んでいる。生徒たちを「共にイノベーションを起こす仲間」と称する北郷先生は、「生徒と同じフィールドに立って、同じ目線で考え、挑戦し続けたい」と言う。

「学校から地域に飛び出すことで、生徒には、いろんな人に出会い、いろんな職業や生き方に触れ、たくさんの選択肢があることを知ってほしいと思っています。そして、地域の眠った魅力を掘り起こす面白さを体感し、この地域にはもっと何かあるんじゃないかという期待感をもってくれたら…」と願っています。すでにあるものの価値に改めて目を向けることにこそ、地域における新しい価値創出の本質があると思うんです。これからも尊敬できる仲間たちと、地域でイノベーションを起こしていきたいと思っています」